

潰瘍性大腸炎について

消化器内科

岡本 博司 さん
国吉病院 消化器内科部長



ことが多いです。内服治療に反応しない場合には、抗TNF α 受容体拮抗薬という新しい薬の注射や、外科的治療を行うこともあります。

潰瘍性大腸炎は、大腸粘膜に特殊な慢性炎症を起す原因不明の病気です。20代での発病が多いですが、あらゆる年齢に見られ、年々10%ずつ増加しています。症状は持続性、もしくは月単位で反復する腹痛、粘液状の血便や下痢、発熱、体重減少などで、病変の範囲や、炎症の強さにより症状の程度はさまざまです。大腸がんの原因になることもあります。診断は、大腸内視鏡検査にて粘膜にたぐれや潰瘍がないか観察し、異常があれば組織を少し採取して病理診断を行い、症状の経過などから総合的に行います。血便や下痢が続くようなら病院を受診して相談されることをお勧めします。原因不明で完治は今のところ不可能ですが、5-アミノサリチル酸薬、副腎皮質ステロイド薬、免疫調節薬などの内服治療にて炎症を抑えることが可能なことが多いです。